

当報告の内容は、報告者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「参照文法書研究」（2016年度第3回〔通算第3回〕研究会）

Title: Studies on Reference Grammars (3rd meeting)

日時：2017年3月27日（月）13:00–18:00

Date: Mar. 27, 2017 (Mon.)

場所：AA研マルチメディア会議室（304）

Venue: Room 304, ILCAA

主催：基幹研究「多言語多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」（LingDy3）

Organized by Linguistic Dynamics Science (LingDy3)

1. 米田信子（大阪大学，AA研共同研究員）

「バントゥ諸語の参照文法書—バントゥ諸語研究における参照文法の位置づけを中心に—」

本発表では、バントゥ諸語研究の動向、日本のバントゥ諸語研究における参照文法、という2つの点からバントゥ諸語の参照文法書について報告した。

バントゥ諸語研究の流れは、宣教師による語彙集や文法スケッチに始まり、20世紀後半からの言語学者による個別テーマの研究、さらに20世紀終盤から始まった言語学者による言語記述、と続く。宣教師による記述は、言語学的資料価値の高いものもあるが、そうでないものも少なくない。20世紀後半には言語学者によるバントゥ諸語の研究も行われるようになった。ヨーロッパでは記述研究も行われていたようであるが、アメリカでは理論言語学の特定の枠組みで特定の現象のみを扱うという研究がほとんどであり、参照文法書は書かれていない。この時期には欧米に留学している母語話者によるバントゥ諸語の研究も始まっている。言語記述が盛んになってきたのは、「消滅の危機に瀕する言語」に関心が集まり始めた20世紀終盤になってからである。この頃には、母語話者によるバントゥ諸語の研究がアフリカの大学でも行われるようになってきた。ただし、（声調に特化した研究は行われているが）20世紀に出版された参照文法書で声調の分析が行われていたり、例文に声調の表記をしているものはほとんどない。

日本におけるバントゥ諸語研究も3つの時期に分けることができる。第1期は主に声調に関する研究が精力的に行われた時期である。バントゥ諸語の多くが複雑な声調システム持っているにも拘らず、欧米の研究者は声調の分析をほとんど行っていなかった。日本の研究者によるバントゥ諸語の声調の研究は、それまでの欧米の研究者によるバントゥ諸語研究を補完するものであった。この時期には参照文法書は書かれていないが、語彙集と文法スケッチのバントゥ諸語のシリーズ本を発刊しており、世界に日本のバントゥ諸語研究を知らしめた時期でもある。第2期は、博士論文としてバントゥ諸語の参照文法が書かれた時期である。

これが日本におけるバントゥ諸語の参照文法の最初である。声調の表記・分析も含めた緻密な記述は、日本の研究者による参照文法の特徴であり、評価されるところでもある。第3期の現在は、研究国際ネットワーク強化の時期である。日本語で書かれた参照文法書をはじめ、これまでの日本の研究者たちが集積してきた言語情報を欧米の研究者と共有し、共同で研究を進めている。共通の調査項目を検討することで、参照文法も、またそれらを用いた比較研究も、より充実したものになることが期待される。

2. 阿部優子（東外大 AA 研，AA 研共同研究員）

「タンガニイカ湖バントゥ諸語の参照文法」

本発表では、タンガニイカ湖周辺の16のバントゥ諸語について、その歴史的背景から紹介し、現在、入手可能な参照文法および言語記述資料の状況について報告した。

タンガニイカ湖は、19世紀までの奴隷貿易の中継地であったため、その周辺のバントゥ諸語は多くの言語接触があったと考えられる。また、そこでは地域共通語としての内陸スワヒリ語が早い時期から機能していた。19世紀末になると、ヨーロッパからのキリスト教ミSSIONナリーにより、多くの奴隷が解放され、一部は先住民に同化するなどしている。

こうした背景を踏まえて、この地域の参照文法や言語記述資料を概観すると、初期のMISSIONナリーによる言語記述はある程度あるものの、近年の危機言語ドキュメンテーションまでの間、言語記述の空白期があるという特徴も見られる。

16言語のうち、比較研究に耐えられる参照文法は4言語、ほとんど資料がないのが6言語、残り6言語はその間で資料はあるものの部分的なもので、参照文法とはなっていないものであった。

3. 牧野友香（大阪大学大学院博士後期課程，AA 研共同研究員）

「ランバ語の文法書—動詞に関する問題を中心に」

ランバ語は、ザンビアのコッパーベルト州、コンゴ民主共和国の上カタンガ州で話されている、話者人口19万8千人の言語である (<https://www.ethnologue.com/language/lam>)。文法書には、例えばDoke (1922) や Doke (1938) がある。Clement Martyn Doke はランバ語のほかにもズルー語や南ソト語など、南部のバントゥ諸語の記述も行っている。この時代のアフリカの言語は宣教師によって記述されている場合が多いが、Doke はそれらの宣教師と時代を同じにしながら、言語学者と評されることが多い人物である。同時代のその他の記述と比べて緻密な記述がなされてはいるものの、合理性に欠ける説明がなされていたり、分析が

不十分だと思われる部分も多い。本発表では使役形派生接辞の基底形とテンス・アスペクト形式のうち-a-VR-a形式と-li-VR-ile形式について述べた。

まず、ひとつ目の使役派生接辞の基底形とそのプロセスの説明についてである。派生接辞とは動詞語根と末尾辞の間に挿入され動詞に様々な意味を付加するものである。使役形派生接辞は、「～に…させる」というような文字通りの使役の意味を付加するほかに、自動詞を他動詞化する機能も持つ。Doke (1922) と Doke & Litt (1938) は使役派生接辞の基底形を-isy (esy)-とし、環境によっては動詞語根末の子音が消滅あるいは別の子音に交替することがある、と説明している (Doke 1922:106–107、Doke & Litt 1938:191–194)。しかしながら、Meeussen (1967:92) の分析などに代表されるように、基底形を短形-y-と長形-isy (esy)-の2つに設定し、語根末の子音が変わる現象については、環境によって spirantization (摩擦音化) する場合がある、とした方が合理的な説明ができると考えられる。

次に、テンス・アスペクト形式の説明についてである。テンス・アスペクトは動詞語根の前の時制接辞と末尾辞の組み合わせによって表される。本発表では、「発話時に完全にその状態になっていることを表す」とされる-li-VR-ile形式 (Doke 1938:258–259) と、「発話時と同じ日に起こった行動を表」し、さらに動詞によっては現在の状況を表すとされる-a-VR-a形式 (Doke 1938:261) の2つの形式について述べた。これら2つの形式は、Nurse (2008) の言う、動詞が表わす事象が発話時に先行して起こりその状態が今も継続していることを表す < Anterior > (Nurse 2008:97、154–166) の下位分類であると考えられる。両形式の異なる点は、-li-VR-ile形式が事象の結果の継続といった「静的」な側面に重点を置いているのに対して、-a-VR-a形式は動作の成立や状態変化といった「動的」な側面に重点を置いている点である。ただし、動作動詞の場合は情報構造が関係している可能性もあり、これは今後の課題である。

引用文献

- Doke, Clement, M. (1922) *The Grammar of the Language of Lamba*. Mackays, ltd., Chatham.
Doke, Clement, M. & Litt, A. D. (1938) *Textbook of Lamba Grammar*. Witwatersrand University Press.

以上3つの発表をもとに、最後に、文法書記述や、音声・音韻のレベルの表記方法などについて全員で議論した。